

ROSEリポジトリいばらき（茨城大学学術情報リポジトリ）

Title	東日本大震災によるつくば市在住避難者の言語生活の変化と方言意識
Author(s)	杉本, 妙子
Citation	茨城大学人文学部紀要. 人文コミュニケーション学科論集, 15: 83-105
Issue Date	2013-09
URL	http://hdl.handle.net/10109/4582
Rights	

このリポジトリに収録されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作権者に帰属します。引用、転載、複製等される場合は、著作権法を遵守してください。

お問合せ先

茨城大学学術企画部学術情報課（図書館） 情報支援係
<http://www.lib.ibaraki.ac.jp/toiawase/toiawase.html>

東日本大震災によるつくば市在住避難者の 言語生活の変化と方言意識

杉本 妙子

要旨

つくば市の協力を得て「東日本大震災をめぐる方言問題の意識調査」として、つくば市在住の避難者の方々を対象に意識調査を行った。その結果、方言使用の減少などの言語生活の変化から、家族等と離れ離れになって避難生活を送っておられる方々がいることが確認された。そして、その言語生活の状況について「さびしい」「ストレスを感じる」などと思っていることがわかった。また、震災後、約3分の1の人が避難生活の中で方言に関連して困ったり嫌な思いをされていた。一方、支援のための「がんばっぺ福島」のような方言エール等については、必ずしも被災者の力になっているわけではなく、支援する側との意識のギャップが確認された。ふるさとの方言への態度や方言の保存・継承についても、ふるさとの方言が「好き」「愛着を感じる」人は6割台にとどまり、積極的に若い世代にふるさとの方言を継承してほしいとは思わないという態度であった。その他、自由記述からも、ふるさとの方言への思いとともに、先の見えない避難生活の現状をうかがうことができた。

キーワード：東日本大震災、つくば市在住避難者、言語生活の変化、方言意識

1. はじめに

本稿は、「東日本大震災をめぐる方言問題の意識調査」として、つくば市の協力を得て実施した調査の結果をもとに、避難者の言語生活と方言意識について述べるものである。調査は、東日本大震災・福島原発事故にともなって茨城県つくば市内に避難された方々が対象である（以下では「本調査」とする）。同調査結果の概略については、既に『平成24(2012)年度文化庁委託事業報告書 東日本大震災において危機的な状況が危惧される方言の実態に関する調査研究（茨城県）』（以下では『H24文化庁委託事業報告（茨城県）』とする）に報

告したが、そこでは調査項目の一部を取り上げただけで、自由記述の回答についてはほんのわずかしか触れることができなかった。本稿では、調査した全項目について自由記述の回答も引用等しつつ詳しく述べていく。

なお、ここで述べることは、現在（調査時）つくば市に在住している方々対象の調査結果であり、避難されている方々に共通する傾向とは言えないと考えられる。福島県内の避難者の方々や、つくば市以外の茨城県内に避難されている方々の状況と違いがあるかもしれない。そのようなことについては本調査からはわからないが、本調査によって避難されている方々の方言に関わる問題の一部を把握することができた。また、本調査のような方言に関わる調査からも、避難されている方々が今もなお将来を展望できない厳しい環境にあることが浮かび上がってきた。

2. 調査の概要

(1)調査の目的

調査の目的は、ことば（方言）の面から将来に役立つ取り組みを行うことに資するために、東日本大震災によってふるさとを離れ、現在、茨城県内に避難されている方々の方言に関わる状況・問題点や方言に関わる意識を明らかにすることである。

(2)調査実施時期と方法

つくば市役所総務部総務課の協力を得て、調査票等を郵送し、同封の返信用封筒で調査票のみを返送してもらう方法で、調査を実施した。

調査票等は2012年12月17日につくば市役所より郵送され、同12月～2013年2月末までに郵送により返送してもらう形で回収した。

(3)調査対象

調査対象（調査票送付対象者）は、つくば市に在住する東日本大震災による避難者（個人）であり、年代は中学生以上⁽¹⁾の全員である。調査票送付時現在で、調査対象者数は433名であったが、送付した調査票のうち3通は宛先不明で戻ってきた。したがって、送付先（個人）に届いた数、即ち調査対象者数は430である。

(4)回答数と内訳

調査対象者の手元に届いた調査票430のうち、調査票を回収できたのは186（送付数430の43.3%）である。このうち有効回答数（以下「回答数」とする）は178である。その内訳は以下のとおりであり、男女の幅広い年代から回答をいただくことができた。ただし年齢構成

では60代以上の高年齢層に偏っている。

年代	80代以上	70代	60代	50代	40代	30代	20代	10代	計
男性	6 (8.1)	16 (21.6)	23 (31.1)	9 (12.2)	8 (10.8)	7 (9.5)	3 (4.1)	2 (2.7)	74 (100)
女性	13 (13.8)	15 (16.0)	28 (29.8)	11 (11.7)	13 (13.8)	6 (6.4)	6 (6.4)	2 (2.1)	94 (100)
性不明	1	3	6						10
計	20 (11.2)	34 (19.1)	57 (32.0)	20 (11.2)	21 (11.8)	13 (7.3)	9 (5.1)	4 (2.2)	178 (100)

* 「性不明」は性別無回答のもの。

** 回答者の割合(%)は、「男性/女性/計」ごとの数値。

*** 10代の回答は全て「中高校生」。

(5) 本来の居住地（震災前の居住地）

つくば市には原発事故による福島県からの避難者が多い。2013年3月22日現在、つくば市内の避難者数は208世帯515人であり、このうち205世帯505人が福島からの方である。⁽²⁾ ここで、福島県については浜通りは市町村単位で、その他の福島県・他県については具体的に記入してもらう形で本来の居住地（震災前の居住地）を尋ねた。その結果は下記のように、双葉町、浪江町、南相馬市をはじめとするほとんどが浜通りから避難された方であり、つくば市への避難者の震災前の居住地の状況と概ね一致していた。

(表) 以前の居住地別回答者数（多い順、() 中は%）

自治体名	回答者人数	つくば市在住者数*	つくば市在住者数**
双葉町	63 (35.4)	147 (28.3)	144 (28.0)
浪江町	39 (21.9)	97 (18.7)	101 (19.6)
南相馬市	24 (13.5)	95 (18.3)	89 (17.3)
いわき市	15 (8.4)	36 (6.9)	40 (7.8)
大熊町	13 (7.3)	27 (5.2)	27 (5.4)
富岡町	12 (6.7)	42 (8.1)	39 (7.6)
楢葉町	5 (2.8)	31 (6.0)	30 (5.8)
福島県(他)	4 (2.2)	29 (5.6)	35 (6.8)
他県	2 (1.1)	10 (1.9)	10 (1.9)
計	178 (100)	520 (100)	515 (100)

* 2012年10月15日現在の人数 ** 2013年3月22日現在の人数

(6) 調査票

調査票は避難者対象用の「東日本大震災をめぐる方言問題の意識調査」⁽³⁾と題するもので、表紙を含めて5ページのものである。調査項目の内容は、茨城県の本事業と連携して行って

いた福島県・宮城県の取り組みの一環として作成された調査票をもとにした、以下に示すような5つに大別できるものである。

- A 方言の使用状況について *小設問7
- B 方言の問題や効用 *小設問5
- C 文化としての方言保存・継承、方言への愛着・評価について *小設問7
- D 自由記述（現在の暮らしの中で方言を使うことについての思い）
- E 自由記述（方言にまつわるエピソードや当該の調査についての意見等）

このほか、フェイスシート（年齢、性別、本来の居住地）について回答してもらった。記名欄は設けたが回答は任意とし、その他の個人に関わることは質問していない。

B・Cの設問項目については、参照しながら回答してもらうための「提示資料」（9ページ）を添えた。提示資料に取り上げたのは、被災者・被災地支援者用の方言パンフレットの例、方言用語集の例、各種の方言・共通語エール、被災文化財救済や伝統文化の復活に関する新聞記事、方言に関わる新聞記事である（資料は省略）。

3. 調査結果

設問（概ね調査票に同じ）とその結果（結果は、[全体（男性：女性）]の形で回答数と割合（%）を提示）を示しながら見ていく。結果に対する分析は、A～Cでは、関連する設問がある場合は、いくつかの設問をまとめて述べていく。なお、性別不明の回答もあるため、男女の回答数の合計数は全体数と一致しない場合がある。

3.1 「A 方言の使用状況について」

(1)方言の使用状況の変化と意識

A01.震災前と比べて、ご家族（お子さんやお孫さん または ご両親やおじいさん・おばあさん）と方言を使ってお話しされる機会はどうなりましたか？

- 01.増えた [6(3.4) (2(2.7) : 4(4.3))]
- 02.減った [48(27.0) (20(27.0) : 27(28.7))]
- 03.変わらない [122(68.5) (51(68.9) : 63(67.0))]

A02.では、ご親戚や顔見知りの同郷の方と方言を使ってお話しされる機会はどうですか？

- 01.増えた [5(2.8) (2(2.7) : 3(3.2))]
- 02.減った [73(41.0) (31(41.9) : 41(43.6))]
- 03.変わらない [99(55.6) (40(54.1) : 50(53.2))]

A03. (上のA01.とA02.で「02.減った」という方に向かって) そうした状況についてどのように感じますか?

- | | | |
|-------------|-----------|------------------------|
| 01.さびしい | [41(49.4) | (15(46.9) : 25(51.0))] |
| 02.ストレスを感じる | [15(18.1) | (7(21.9) : 8(16.3))] |
| 03.方言で話したい | [8(9.6) | (4(12.5) : 3(6.1))] |
| 04.その他 | [19(22.9) | (6(18.8) : 13(26.5))] |

※%は、仮に全回答数の合計(全体83、男性32、女性49)を母数として算出。

家族との方言による会話は、男女差なく「変わらない」が7割弱、「減った」が3割弱、「増えた」はわずかである。上述のように、本調査の回答者は高齢層に偏っており、方言使用が多い世代であろうと推測できるが、それにも関わらず家族との方言による会話が3割近くの人において減少している。これは、震災以前と震災後の家族状況の変化が関係していると考えられる。東日本大震災にともなう茨城県内への広域避難者の状況をアンケート調査によって明らかにした原口(2013)によれば、震災時と現在(=2012年9月調査時)の家族の状況変化では、「母子・父子のみで生活」している世帯は、震災時の53世帯から78世帯に増え、約1.5倍となった。また「離れて生活している家族がいる」ご家族は、震災時より約3.5倍の大幅増となり、全587世帯のうち302世帯が「離れて生活している家族がいる」ことが示された。母子避難による家族離散だけでなく、世代間離散や就業状況による夫婦間離散の存在が示唆される。」とあり、家族離散が方言使用の減少の要因となっていることが推測される。

また、親戚・同郷の人との方言による会話では、家族との結果と比べて「減った」と回答している人がさらに10ポイント以上も多くなっている。上掲の以前の居住地に示したように、つくば市在住の避難者の方々のほとんどは福島県浜通りを中心とする広域からの方々である。また、筆者が聞いた範囲では、どなたも避難せざるを得ない状況の中で、つくば市に落ち着くまでに6か所、7か所と避難を重ねて現在に至っており、現在身近にいる同郷の人と言っても以前からの知人ではないようである。A01.とA02.の結果は、避難を余儀なくされ、かつて方言で会話をしていた地域共同体から離れ離れになり、震災前の家族とさえ離れて暮らさざるを得ない人がいるという事実が、方言での会話の減少という言語生活の変化の形で表れているものと言えよう。このような状況について、男性は女性よりも「ストレスを感じる」「方言で話したい」とする回答が多く、女性は「さびしい」と「その他」が多い。「その他」の回答を見てみると、方言での会話が減っても「特に方言を意識していない」(50代女性)、「特に何も感じない」(40代男性)や「関東出身なのであまり違和感はない」などの回答が見られる一方で、「子供達孫達とばらばらになった」(70代女性)、「別々に避難中なのでしかたがない」(60代男性)や「(かつての住いにいた頃は)友達とお茶を飲んだり食事に行っていた」(60代女性)という回答が見られ、家族が離れ離れになっていたり、かつての共同

体での生活が継続されていない人がいることが「その他」の記述からもわかる。また、「会話そのものが少なくなった」(50代女性)や「(現在の住いで)同郷の人と話しをする時が一番楽しい」(70代女性)という回答もあった。家族・親族や同郷の知人との方言会話の減少という言語生活の変化が、生活そのものの質を低下させている場合があると言えよう。⁽⁴⁾

(2) 顔見知り以外との会話

A04.震災前と比べて、顔見知りではない方とお話しされる機会はどうなりましたか？

- 01.増えた [74(41.6) (34(45.9) : 36(38.3))]
- 02.減った [63(35.4) (22(29.7) : 36(38.3))]
- 03.変わらない [40(22.5) (18(24.3) : 21(22.3))]

A05.顔見知りではない方とお話しされるときには、どのようなことばで話されますか？

- 01.方言 [17(9.6) (10(13.5) : 7(7.4))]
- 02.標準語 [89(50) (38(51.4) : 48(51.1))]
- 03.方言と標準語が交じる [70(39.3) (26(35.1) : 37(39.4))]
- 04.その他 [7(3.9) (5(6.8) : 2(2.1))]

A01.~03.の回答とは逆に、現在の環境の中で顔見知りでない人との会話が増えたとする回答が最も多い。また顔見知りでない人との会話では、およそ半数の人が標準語⁽⁵⁾を使っていると思っており、方言で会話していると回答した人は全体で約1割、女性ではわずか7.4%である。震災以前と比べると、顔見知り以外との会話が増え、標準語や方言と標準語の交じったことばを使用する機会も増えているという言語生活の変化が生じていると言える。なおA05.「その他」の記述は、女性からは「(特に)意識しない」(60代、20代)、男性からは「時と場合による」(20代)、「方言とつくばの方言が混ざる」(40代)、「東京育ちだから」(70代)であった。

(3) 現在の居住地の人との会話

A06.現在、お住いの地域の方とお話しされる機会はどうですか？

- 01.話す機会がある [120(67.4) (50(67.6) : 63(67.0))]
- 02.話す機会はない [53(29.8) (23(31.1) : 27(28.7))]

A07.(上のA06.で「01.話す機会がある」という方にうかがいます) お住いの地域の方とお話しされるときには、どのようなことばで話されますか？

01.方言	[13(10.8)	(5(10) : 8(12.7))]
02.標準語	[49(40.8)	(20(40) : 27(42.9))]
03.方言と標準語が交じる	[64(53.3)	(27(54) : 31(49.2))]
04.その他	[4(2.2)	(2(4) : 2(3.2))]

およそ3分の2の人が現在住んでいる地域（つくば市）の人と会話の機会があり、方言と標準語が交じることばか標準語で話していると思っているという結果である。住んでいる地域の人との会話が多数派であるのは、現在のつくば市の生活に馴染んできているということであろう。A06.07の結果は、顔見知りではない人と話すときのことばについてのA04.05の回答と同様の傾向であるが、A05よりも「方言と標準語が交じる」と回答している人が14ポイント多く、「標準語」が約10ポイント少ない。その理由の一つとして、地元福島と茨城の方言（ことば）の違いをあまり感じていない（80・70・60代女性、B01の「その他」の回答）ことがあると考えられる。

「その他」の記述は、上のA05.とほぼ同様である。それ以外として、「方言と標準語が交じる」と回答した人の中に「(犬の散歩で) 地元の人に話しかけられ、うれしい」(70代女性)という回答があった。

3.2 「B 方言の問題や効用」

(1)方言使用における問題 *提示資料(=省略)を参照しながらの回答

B01.震災後、ことばや方言のことでなにか困ったり、嫌な思いをしたりといったことはありませんでしたか?「そうだ」と思うものいくつかでも○を付けてください。(複数回答可)

01.方言が通じなかった	[19(10.7)	(11(14.9) : 8(8.5))]
02.方言が話せない	[19(10.7)	(8(10.8) : 11(11.7))]
03.方言を馬鹿にされた	[4(2.2)	(3(4.1) : 1(1.1))]
04.避難先の方言がわからない	[22(11.2)	(9(12.2) : 13(13.8))]
05.その他	[34(19.1)	(12(16.2) : 20(21.3))]
(無回答)	[93(52.2)	(36(48.6) : 49(52.1))]

この設問への回答は、無回答が93人(52.2%)と最も多い。この無回答者を、仮にことば(方言)の問題を感じていない人としておく。「その他」の回答者の中にも、ことば(方言)に関して問題がない人とみなすことができる回答がある。「困っていない/嫌な思いをしたことはない/問題はない」と答えた人(9人)、「方言で話せる/変わらない/気にしていない/意識していない」のように答えた人(7人)、「標準語で話すので困らない」や「茨城のことばは地元のことばはあまり変わらない」などと答えた人(7人)がそれである。このよ

うに答えた人と無回答を合わせると116人（65.2%）であり、全体のおよそ3分の2にあたる。しかし、かつての暮らしの中では、01.~04.を経験することは少ない、あるいはほとんどなかっただろうと考えられるので、これらの回答をした人および「その他」の中で具体的にことば（方言）に関わる問題などを回答したおよそ3分の1の人は、現在の避難生活の中でことば（方言）をめぐる困ったり嫌な思いをしたりした経験をしていることになる。この数は、決して少ない数ではない。「方言が通じなかった」「避難先の方言がわからない」と答えている人がそれぞれ約1割、また「方言が話せない」人も約1割、少数だが「方言を馬鹿にされた」人もいる。「その他」の具体的な回答でも、「方言を注意される」「方言を話すのは恥ずかしい」や「子供達も話す言葉は気を付けている」などが見られる。筆者も直接・間接に、方言が問題となっていてずっと外出できなかつた人、避難先の方言になじめずに転居した人がいることを聞いている。3人に1人が避難生活という困難な状況の中で、さらにことば（方言）の環境が避難されている方々の生活の質や心の問題につながる恐れのある問題となっているのである。衣食住の問題に比べるとことば（方言）の問題は、避難されている方々ご自身も問題として認識しにくかったり、後回しにされたりする傾向があるようだが⁽⁶⁾、本調査で得られた結果は、ことば（方言）も避難者支援において見落としとしてはいけない問題点であることを示していると言えよう。

(2) 方言パンフレット等の必要性への意識 * 提示資料（＝省略）を参照しながらの回答

B02.東日本大震災の被災地へ支援に来た医療関係者などのために、被災地の方言を簡単に説明したパンフレット等がいくつか作られています。被災地の支援活動を行う上で、こうした方言パンフレットは必要なものだと思いますか？

- | | | |
|--------------|-----------|------------------------|
| 01.必要だ | [54(30.3) | (23(31.1) : 28(29.8))] |
| 02.必要ではない | [39(21.9) | (19(25.7) : 17(18.1))] |
| 03.どちらともいえない | [75(42.1) | (30(40.5) : 43(45.7))] |

この調査項目については、ボランティアとして支援した経験のある人を対象にした調査で、同じ質問をしている。支援経験者の回答では、「必要だ」は36人（81.8%）、「必要ではない」は1人（2.3%）であり、ほとんどの人が医療関係者などのためには方言パンフレット類は必要だと思っているという回答であった。⁽⁷⁾しかし、避難されている方への同じ問いかけでは、「必要だ」の回答は、3割程度にとどまっている。「必要ではない」と考えている人も2割もいる。支援する側と被災された人という立場の違いが大きな意識の違いとなっていることがわかる。避難されている方からの「必要だ」の回答が少ない理由の一つとして、地元の方言は標準語に近いことばだという意識がある（この項目等への自由記述⁽⁸⁾）ものと思われる。

(3)方言エール・スローガン等への意識 * 提示資料 (=省略) を参照しながらの回答

B03.震災後、「がんばっぺ福島」「けっぱれ東北」のように、被災地各地の方言を使ったかけ声(方言エールや方言スローガン)が聞かれました。こうした方言によるかけ声は皆さんの力になりましたか?「そうだ」と思うものいくつかでも○を付けてください。(複数回答可)

01.親しみがもてる	[102(57.3)	(41(55.4) : 54(57.4))]
02.励まされた	[57(32.0)	(21(28.4) : 35(37.2))]
03.特に何も感じない	[34(19.1)	(17(23.0) : 16(17.0))]
04.馬鹿にされているようだ	[12(6.7)	(6(8.1) : 4(4.3))]
05.その他	[15(8.4)	(6(8.1) : 9(9.6))]

B04.「がんばろう東北」「がんばろう茨城」のような共通語によるかけ声については、皆さんの力になりましたか?「そうだ」と思うものいくつかでも○を付けてください。(複数回答可)

01.親しみがもてる	[85(47.8)	(31(41.9) : 47(50))]
02.より励まされる気がする	[71(39.9)	(27(36.5) : 40(42.6))]
03.励まされた感じがしない	[17(9.6)	(6(8.1) : 11(11.7))]
04.特に何も感じない	[35(19.7)	(23(31.1) : 11(11.7))]
05.馬鹿にされているようだ	[3(1.7)	(3(4.1) : 0(0))]
06.その他	[15(8.4)	(6(8.1) : 8(8.5))]

B05.「がんばってや東北」「ちばりよー福島」のような他地域の方言エールやスローガンについてはいかがですか?「そうだ」と思うものいくつかでも○を付けてください。(複数回答可)

01.親しみがもてる	[66(37.1)	(26(35.1) : 36(38.3))]
02.より励まされる気がする	[44(24.7)	(17(23.0) : 25(26.6))]
03.励まされた感じがしない	[17(9.6)	(6(8.1) : 10(10.6))]
04.特に何も感じない	[30(16.9)	(22(29.7) : 7(7.4))]
05.馬鹿にされているようだ	[5(2.8)	(0(0) : 4(4.3))]
06.意図が不明	[21(11.8)	(8(10.8) : 12(12.8))]
07.見たことがない	[37(20.8)	(10(13.5) : 25(26.6))]
08.その他	[11(6.2)	(2(2.7) : 7(7.4))]

被災地の方言を使ったエール・スローガンに対する回答 (B03.)、共通語を使ったエール・

スローガンに対する回答 (B04.)、他地域方言＝支援者の地元方言 (以下では「支援者方言」とする) を使ったエール・スローガンに対する回答 (B05.) を合わせて見ていく。

被災地・被災者を応援しようとするエールやスローガンは、「親しみがもてる」や「励まされた／より励まされた気がする」など、好意的に受け止めている人は、多い順に「被災者方言によるもの>共通語>支援者方言によるもの」になっている。また、男女別に見ると、どの種類のエール・スローガンについても、男性よりも女性のほうが好意的に受け止めている割合が高い。一方、「励まされた感じがしない」「馬鹿にされているようだ」や「意図が不明」など明らかにマイナスに受け止めていると考えられる回答や、「特に何も感じない」という回答 (これはプラスでもマイナスでもないというよりも、エール・スローガンの意図を考えるとマイナスと言える) を見てみると、女性に比べて男性にこれらの回答が多い。

選択肢のうち「励まされた／より励まされた気がする」の回答について見てみると、被災者方言によるものが57人(32.0%)なのに対して共通語によるものは71人(39.9%)と共通語によるエール・スローガンのほうがやや多い。共通語によるものは地元以外の人からの応援として、より励まされたと感じる人がいるということであろう。なお、支援者方言によるものは44人(24.7%)と最も少ない。これは、他地域方言であるため「意図が不明」や「見たことがない」人がいるためだと考えられる。

選択肢の中では「馬鹿にされているようだ」は最も回答が少なかったが、このように受け止める方が少数でもいること、また、共通語や支援者方言によるエール・スローガンよりも被災地方言によるものでこの回答が多いことが注目される。

「その他」の記述を見ると、B03.では「がんばっぺ福島」について、「私達双葉町は何をがんばればいいのかわからない」「帰る所がないのに何をがんばるの」「震災だけだったらがんばれたと思う」「これ以上何をがんばればいいのかと反感をもった」のような回答が6名からあった。また、「地方色を出しているだけだと思う」「あまりにも受けを狙った感じに思えた」のように不快感につながっていると思われる記述もあった。B04.の共通語によるエール・スローガンについては、「これ以上何をがんばればいいのか」「『がんばろう』がいやだ」「もう言わないでください」「がんばろうが重い」などが10回答もあった。つくば市在住の避難者の方のほとんどは、原発によって避難を余儀なくされた方々である。上の記述のほかにも「心が折れそうだ」「悲しくなる」といった悲痛な声から、地震・津波による被害者とは異なる複雑な状況の中で、精神的にも疲弊し、希望が持てない状態が続いていることがわかる。⁹⁾ そのような状況において「がんばろう」は避難者の心を傷つけかねない一言になっているのである。

さて、上述の結果を、支援者に対する調査結果と比較してみたい。支援する側が被災者の「力になると思う」と考えているのは、「被災者方言によるもの (77.3%) >>支援者方言によるもの (61.4%) >共通語 (59.1%)」の順となっている。避難されている方が好意的に受け止めているのは「被災者方言によるもの>共通語>支援者方言によるもの」の順で、「被災者

方言」が最も多い点では一致しているが、「共通語」と「支援者方言」への回答は異なっている。また、支援者側がこれらのエール・スローガンについて「(被災者の)力にならないと思う」と回答しているのは、どの種類のエール・スローガンでも1割以下と少ないが、避難されている方の2割近くは「特に何も感じない」と回答し、少数だが「馬鹿にされているようだ」と回答している方もいる。「その他」の記述に見られる被災地方言や共通語のエール・スローガンに対する憤りや不快感を表す回答も少なくない。

応援しようとするエール・スローガンに対して、「親しみを感じる」という選択肢を選んだ避難者がどのエール・スローガンでも最も多く、「励まされた」と感じる方もかなりいる。しかし、被災者・被災地の事情は様々である。方言エール・スローガンに親しみを感じる人も少なくないが、何も感じなかったり反感や不快感を感じている人もいる。必ずしも方言エール・スローガンが、支援者など声をかける側の意図どおりに伝わらない場合があることを、B03.~05.の回答は示していると言える。

3.3 「C 文化としての方言保存・継承、方言への愛着・評価について」

(1)被災地や避難地区の地域文化・文化財の保護や祭りの復興の取り組みへの評価 *提示資料(=省略)を参照しながらの回答

C01.被災地や避難地区の地域文化・文化財を保護したり、お祭りを復興させたりという取り組みも盛んです。こうした取り組みについて、どう思いますか?「そうだ」と思うものいくつかでも○を付けてください。(複数回答可)

- | | |
|------------|-------------------------------------|
| 01.必要だと思う | [110(61.8) (52(70.3) : 54(57.4))] |
| 02.心の支えになる | [78(43.8) (30(40.5) : 42(44.7))] |
| 03.不要だ | [9(5.1) (2(2.7) : 7(7.4))] |
| 04.優先順位が違う | [22(12.4) (7(9.5) : 14(14.9))] |
| 05.その他 | [15(8.4) (5(6.8) : 8(8.5))] |

被災地や避難地区の地域文化・文化財の保護や祭りの復興への取り組みについて、「必要だと思う」という人が男性では7割、女性も6割近くと最も多く、「心の支えになる」と回答した人も男女とも4割以上と多い。「必要だと思う」「心の支えになる」の両方またはどちらか一方を選んだ人は146人(82.0%)にのぼり、地域の文化の保護・復興の取り組みは、避難されている方の多くから評価されているといえる。「その他」にも、「伝統文化を残してもらいたい」(70代)、「茨城新聞を見て、各地の行事を見ると自分も力がわきます」(70代男性)、「避難して日の浅い時は、今どきそんなのはいらないと思いましたが、だんだん日がたつにつれ、地元ではがんばっていると心の支えになりました」(70代女性)という記述が見られた。

しかし、少数だが「不要だ」と回答している人がいることや、全体で1割以上の人が「優

先順位が違う」と受け止めていることは注目すべきであろう。これらの回答に関連して「その他」においても、「心の支えになる」が「優先順位が違う」ように思う(60代女性)、「生活の基盤を構築した後に、復興、復旧祝いとして皆で行うべきだ。順番が間違っている様に思う(60代男性)、「良いと思うけど、早く帰れるようにするのが先だと思う(30代女性)、「原発で汚染地域となった所では、(文化の保護・復興は)意味がない。それよりも、もっと大事なこと(避難の必要性)があると思う(50代女性)など、文化財の保護などよりも優先すべきことがあることについての具体的意見が見られた。また、「福島から離れて生活しているので、色々の行事に参加できない為、どうしてもいい事、(中略)とにかく一日一日生きるのが精一杯です(60代)や、「必要なものも不要なものもあるような気がする(60代女性)、「何でも元のようにとやることはないと思う。必要なものだけ(守っていききたいものだけ)しばってやればいいのか(80代女性)などという記述も見られた。「必要だと思う」「心の支えになる」という思いを持ちながらも、避難している今の状況が改善されていないことをうかがわせる結果だと言えよう。

(2) 方言保存の取り組みへの評価

C02. 私たちは、ふるさとのつながりを考えるうえで「方言」は大変重要なものだと考えています。方言を保存しようという取り組みについては、どう思いますか? 「そうだ」と思うものいくつかを○を付けてください。(複数回答可)

- | | |
|------------|-------------------------------------|
| 01.必要だと思う | [107(60.1) (52(70.3) : 51(54.3))] |
| 02.心の支えになる | [56(31.5) (22(29.7) : 29(30.9))] |
| 03.不要だ | [11(6.2) (5(6.8) : 5(5.3))] |
| 04.優先順位が違う | [17(9.6) (8(10.8) : 9(9.6))] |
| 05.その他 | [17(9.6) (4(5.4) : 13(13.8))] |

C02.の方言を保存する取り組みを肯定的に評価する人は、「必要だと思う」の回答がC01.と同程度の約6割で最も多いが、男女別にみると女性の回答の低さが著しい。「心の支えになる」の回答では、文化の保護が4割以上だったのに対して方言の保存では約12ポイント低い約3割にとどまっている。「必要だと思う」「心の支えになる」の両方またはどちらかを選んだ人は131人(73.6%)で、方言を保存する取り組みも多くの方から評価されていると言えるが、文化の保護と比べるとやや少ない。これに関連する「その他」の記述としては、「方言がなくなると生まれ故郷が遠くなったような気がする(80代女性)、「高齢者の方にとっては大事だと思う(50代女性)があった。

一方、否定的評価の「不要だ」はC01.よりわずかに多く、「優先順位が違う」はやや少なかった。「その他」の記述としては、「方言を尊重することは大切と思うが特別扱いする必要

はない」(70代男性)、「必要なものは残るので、あえて問うべき、取り組む問題ではない」(60代男性)、「簡単に方言はなくならないと思うので、そこまで重要とは思わない」(30代女性)、「無理に話したり、話さなかったりせず、自然でよい」(50代女性) など、積極的に保存はしなくてもいいと考えていると思われる記述が多かった。

(3)文化庁の方言の保存・継承への取り組み支援への評価

C03.今回の災害で皆さんのご出身地の方言が失われることがないように、国の機関である文化庁は保存・継承への取り組みを支援したいと考えています。こうした取り組みについては、どう思いますか? 「そうだ」と思うものいくつかでも○を付けてください。(複数回答可)

01.必要だと思う	[98(55.1)	(48(64.9) : 46(48.9))]
02.心の支えになる	[49(27.5)	(17(23.0) : 28(29.8))]
03.不要だ	[25(14.0)	(10(13.5) : 14(14.9))]
04.優先順位が違う	[24(13.5)	(8(10.8) : 14(14.9))]
05.その他	[7(9.6)	(3(4.1) : 3(3.2))]

C01.02.と比べると、文化庁の支援を「必要だと思う」とする回答は50%台にとどまり、「心の支えになる」は3割以下となっている。特に「必要だと思う」を選んだ女性が少ないことが注目される。一方、「不要だ」は14%、「優先順位が違う」は13.5%で、男女とも10%以上であった。また、「不要だ」「優先順位が違う」の回答(両方またはどちらかの回答)を年代順に見てみると、80代以上が3人(15%)、70代5人(14.7%)、60代16人(28.7%)、50代7人(35%)、40代7人(33.3%)、30代5人(38.5%)、20代3人(33.3%)となっており、70・80代に比べてそれ以下、特に50代以下の世代に多い。(20代からの回答はなし。)
「必要だと思う」が女性で少なかったこと(C02.でも同じく女性が少ない)やより若い世代のほうが「不要だ」「優先順位が違う」を多く選んでいることから、回答者自身の方言使用の程度(一般に男性よりも女性が、高年齢層よりも若年層で方言使用が少ないこと)と方言の保存にかかわる評価が関わっているのかもしれない。

「その他」の記述としては、「わからない」(2件)のほか、「言葉自体が生き物だと思うので、単に言葉だけの保存では意味がないと思う。その言葉を使う環境でないと」(40代女性)などがあった。

(4)ふるさとの方言への態度

C04.あなたはふるさと(ご出身地)の方言はお好きですか?

- 01.好き [109(61.2) (45(60.8) : 58(61.7))]
 02.嫌い [4(2.2) (1(1.4) : 3(3.2))]
 03.どちらともいえない [63(35.4) (29(39.2) : 32(34.0))]
- C05.あなたはふるさと（ご出身地）の方言に愛着を感じますか？
 01.愛着を感じる [115(64.6) (48(64.9) : 62(66.0))]
 02.愛着はない [11(6.2) (5(6.8) : 6(6.4))]
 03.どちらともいえない [48(27.0) (20(27.0) : 25(26.6))]
- C06.ご自分のお子さんやお孫さんなどの若い世代に、ふるさと（ご出身地）の方言を受け継いでいてほしいと思いますか？また、若い世代の皆さんは、ふるさとの方言を受け継ぎたいと思いますか？
 01.思う [49(27.5) (23(31.1) : 25(26.6))]
 02.思わない [36(20.2) (15(20.3) : 19(20.2))]
 03.どちらともいえない [94(52.8) (37(50) : 53(56.4))]
- C07.(上のC06.で「02.思わない」とお答えになった方にうかがいます) お子さんやお孫さんに、ふるさとの方言を受け継いでほしくないと思う、あるいは若い世代の方が方言を受け継ぎたいと思わないのは、なぜですか？「そうだ」と思うものいくつかを○を付けてください。(複数回答可)
 01.方言が嫌いだから [1(2.2) (0(0) : 1(3.6))]
 02.都会に出たら困ると思うから [29(63.0) (10(62.9) : 17(60.7))]
 03.出身地が知られないようにしたい [5(10.9) (0(0) : 5(17.9))]
 04.その他 [17(37.0) (6(37.5) : 11(39.3))]

※回答者数はC06.の「02.思わない」回答者以外を含めた「全体46, 男性16, 女性28」

C04.ふるさとの方言が「好き」と回答した人が多いものの約6割にとどまっており、「どちらともいえない」が3分の1以上もいる。C05.のふるさとの方言への愛着もC04.と類似した回答であり、「愛着を感じる」が115人 (64.6%)、「どちらともいえない」が48人 (27.0%)と「どちらともいえない」が多いと思われる。また、C04.「嫌い」は4人 (2.2%、60代・40代)、C05.「愛着はない」は11人 (6.2%、70・60代と40～20代)と少数ではあるが、ふるさとの方言への否定的な回答もあった。

ふるさとの方言へのこのような態度から、C06.の子や孫世代への方言の継承についても、受け継いでいてほしい／受け継ぎたいと「思う」は3割に届かず、半数以上の人々が「どちらともいえない」と答えている。また、約2割つまり5人に一人は「思わない」と回答してい

る。その理由の第一は「都会に出たら困ると思うから」であり、「出身地が知られないようにしたい」も約1割もいた。

C07.「その他」の記述を見ると、「使いたい人は使えばいいし、その人の自由」の類が4件(80・70・60代)、「自然のままで良いと思う」類が2件(60・40代)、「方言だけでなく標準語もちゃんと話せた方がいい」類が2件(40代)で、方言を継承させたい／したいとは「思わない」が積極的に方言を否定するわけでもないという意見が多かった。しかし、「帰る所がないのにいつまでも方言はいらない」類が2件(70・60代)、「出身地が知られないようにしたい。避難先では、車のナンバーが…」(40代女性)、「将来、子供が福島出身ということと結婚する際に障害が生じたりするかもしれないと考えています」(40代女性)の記述があり、原発による避難生活であることが、方言継承についての意識にも影響を与えていることがわかる。C04.～07.全体として、ふるさとの方言について「好き」「愛着を感じる」人は6割台にとどまり、「嫌い」「愛着はない」とまでは思わないが、積極的に若い世代にふるさとの方言を継承してほしいとも思わないという態度であるといえる。

ふるさとの方言への態度について、半沢(2013)では、福島方言に「愛着を感じる」のが回答者全員、文化庁の取り組みへの評価も「必要だと思う」が95%、方言を「受け継いでほしい」も78%と、つくば市在住者への調査と大きく異なる。この結果について半沢(2013)では「福島方言そのものへの態度も概して好意的である(C01)。若い世代に方言を継承して欲しいとの声も多い(C03)。調査法が異なるため、単純な比較はできないが、仮設住宅等で県内避難の方々にかがった場合に比して方言継承を望む声が多い。あるいはふるさとを離れ、方言の異なる地域で生活を送っておられることがこうした継承を希望する態度に影響しているとも考えられようか。」(7ページ)(筆者注：引用文中の調査項目番号のC01は本調査のC05.に、C03は本調査のC07.にほぼ相当する。調査地は大分県)と述べている。方言への態度についての本調査の結果が半沢(2013)と大きく違うのは、福島県に隣接し、方言の面でも類似している茨城県に在るという地理的・言語的環境の違いが影響しているのかもしれない。

3.4 「D・E 自由記述」から見えること

自由記述項目として設けたD・Eの2項目で得られた回答を見ていく。本調査の結果は、自由記述が多いことが特徴として指摘できる。現在の暮らしの中で方言を使うことについての思いを尋ねたDには例示の指摘を含めて120人(全回答者の67.4%)から、方言にまつわるエピソードや当該の調査についての意見等を尋ねたEには76人(42.7%)から回答を得た。この自由記述回答の多さは、調査に協力してくださった方々が、いかに本調査に誠実に答えてくださったかを物語るものでもあろう。多くの具体的な意見を示すことで、方言や避難生活における課題に触れていくこととする。

(1)D 自由記述：現在の暮らしの中で方言を使うことについての思い

D 県外に避難されている暮らしの中で、ふるさと（ご出身地）の方言を聞いたり話したりすることについて、どのように思われますか？ お感じになることについて、お教えください。

（例）ほっとして心がなごむ。／ やっぱりふるさとの方言はいいなあと思う。／ 同郷の人と話すと、がんばろうという気持ちがわいてくる。／等

回答（=記述）者 [全体120(67.4) (男性50(67.6)：女性64(68.1)：性不明6(60))]

調査票の設問は上のとおりであり、例示を指摘した回答も含めて自由記述を内容で分けると、おおよそ次の4つに分けることができる。

- ①ふるさとの方言に安らぎ・良さ・温かさを感じる、力づけられる 76人 (63.3%)
- ②ふるさとの方言はいいと思うが、今の暮らしでは必要ない／使わないようにしている 6人 (5%)
- ③方言を聞くと悲しくなる／方言で癒されない／不安になる 5人 (4.2%)
- ④その他 33人 (27.5%)

①類の自由記述が最も多かったのは当然のことと言えようが、避難ということがなければ思いもしなかったであろう②や③も少数だがあった。②③の記述では、震災以降のこれまでの生活の中でことば（方言）で苦勞されたことや、複雑な思いでふるさとの方言と対していることがわかる。④その他の意見としては、福島の方言と茨城の方言がほとんど変わらないことや、方言の面での問題は特になく、といった記述が多かった。以下に、大別した4つについて自由記述を紹介したい。なお、20代・10代の回答者は少なかったため、回答者の性別については記入しない。

- ①ふるさとの方言に安らぎ・良さ・温かさを感じる、力づけられる
 - ・ふるさとの方言を耳にすると、お互いに話が弾み、近況を語り、励まし合い、ふるさとの山河、町が目に見え、いつの日か帰るぞ！と自分を励ます。(80代男性)
 - ・知らない土地に来て生活していると知らずに緊張しているのか、地元に戻って方言で話すとホッと心がなごみストレスが少し解消されます。(70代女性)
 - ・自分のアイデンティティーが確認できる。いいものだと思う。(60代男性)
 - ・もちろんほっとするし、自分ばかりが不幸ではない、町の人全員が苦勞しているのだと思う。また親、兄弟も同じ思いで苦勞している。(中略) 方言など出てくるとなごみます。(60代女性)
 - ・方言によって心がいやされる。本音でしゃべれる。私達はつねに全身で緊張しているので、

ふるさとでの言葉は「ホッ」とします。聞くより、自分が方言をしゃべっている時がいやされる。(60代)

- ・すぐくほっとします。福島県の方たちと話す事で精神的に癒され、同じ境遇である方などはお互いに気持ちを察する事が出来る事から会話もはずみます。(50代女性)

②ふるさとの方言はいいと思うが、今の暮らしでは必要ない／使わないようにしている

- ・やっぱりふるさとの方言はいいと思いますが、ここ茨城で暮らして行くには方言はあまり必要はない。(70代男性)
- ・私は、双葉町からの避難なので、原発が原因で避難しています。公の場では、囲りの方に避難者だと分からないように方言などは使わないように努力しています。(中略)目立たないようにひっそりと暮らしています。(60代女性)
- ・バレー部(ママさんバレー)の集まりに参加しましたが、みなさんイントネーションも変わり、方言で苦しんだとも聞きました。方言は忘れ、つくばでの生活を楽しまたいと思うのはいけませんか。(40代女性)
- ・(方言は)なつかしいが、県外で話す事をひかえているので忘れた方が良いとも思う。(30代女性)
- ・ふるさとの方言はいいなあと思うけど、友達とは話せない。笑われるから。(10代)

③(方言を聞くと)悲しくなる／方言で癒されない／不安になる

- ・現在、置かれている状況からは方言を聴くと、何ともやりきれなさを感じる。残るものは継承されていくだろうし、消えるものは消滅する。あえて人為的な操作は必要ないだろう。(60代男性)
- ・ふるさとの方言を聞いたり話したりしても、特に言葉でいやされたりするとは自分は思いません。現在の自分と避難前の自分とでは、言葉に表す事のできない心の落ち込みがあるので、当面は汗を流して働き、生活第一と考えています。それをクリアすれば、方言等の言葉の持つ力や、役割をわかるとは思うが、その時が来ることを自分も願っている。(60代男性)
- ・今現在、先が見えない状況の中で方言を聞いたり話したりすることは、不安及びストレスを感じます。話をするだけなのに、常に言葉ひとつひとつを選びながら話をする事になります。やはり約30年(結婚後)生活をしてきた土地での思い出は、今となってはつらいです。(40代女性)
- ・ホッとするし、なつかしく思う。それと同時に悲しくもなる。帰れないので。(30代女性)

④その他

- ・つくば市は、旧来からの居住者の方々が話す言葉は比較的ふるさとの方言と似ているので

苦労することはあまりありません。(60代男性)

- ・福島から茨城に避難して来ましたが、従来使っていた方言でも充分会話ができ、安心しました。又相手の話す言葉も、理解できました。(50代男性)
- ・同郷の人と話をして、何かを感じるということ自体、考えませんでした。当然のことであり、考えて話すことはストレスを感じます(60代)
- ・日々の暮らしの中では、方言がどうのこうのと考えたことはない!(50代女性)
- ・3.11から色々な所に避難をしてきました。ここで6回です。思い出すと、長いような短いような日です。でも落ち込んでばかりいられません。先を見ながら、自分なりの行く先を探し、そこを自分の終りとしてがんばるつもりで、ここで同郷の人達と仲良く暮らします。(70代女性)

(2)E 自由記述：方言にまつわるエピソードや当該の調査についての意見等

E ふるさと（ご出身地）の方言の興味深いことば、方言ならではの表現、方言にまつわる出来事などがありましたら教えてください。また、この調査について、何かお気づきのことやご意見がありましたら教えてください。

回答（=記述）者 [全体76(42.7)（男性28(37.8)：女性45(47.9)：性不明3(30))]

設問Eは、最後に方言や本調査だけでなく自由にご意見をいただく目的で設けた。回答者はDの120人よりは少ないものの、回答の量ではDと同程度の記述があった。中には調査票裏面にまで書いてくださった方もあった。D項目同様に、記述を大まかに分類して見ていく。なお、設問Eへの回答においても、20代・10代は回答者が少なかったので性別については記入しない。

- ①ふるさとの方言・俚言そのものの記載や方言による意見、エピソード等 40人 (52.6%)
- ②方言に関わる①以外の意見等 13人 (17.1%)
- ③調査についての意見（批判） 10人 (13.2%)
- ④その他 18人 (23.7%)

※一部の長い記述においては、2つに分類した回答がある。

記述の中で最も多かったのが①類だが、その中でもふるさとの方言・俚言そのものを書いてくださった方が多かった（30人ほど）。方言形と共通語を対照させてふるさとの方言を何語も挙げてくださった方や、意味や使い方や音調の説明を書いてくださったものなどがあつた。数が多いため、具体的な記述は省略するが、ふるさとの方言への愛着の表れと言えるだ

ろう。また、方言エピソードとしては、方言が話しのきっかけや楽しい笑いにつながったこと、逆に方言で苦労したことなどがあつた。②のその他の方言に関する記述としては、方言（標準語）についての意見や観察、方言と生活についての思いなどが見られた。いくつか具体的な記述を紹介する。

①ふるさとの方言・俚言そのものの記載や方言による意見、エピソード等

- ・私が子供の頃はほとんど方言で話をしていましたが、今の若い人や子供達は標準語で話していますので、理解出来ない言葉もあると思いますが、方言がなくなるとさみしいです。特に思うのは「もごい」という言葉です。可愛いという意味ですが内容は単に可愛いという以上に可愛い。標準語では何とも表すことばは見つかりません。(70代男性)
- ・多方面からの人達の話しの輪に入る時、話しのきっかけが方言の意味が話題になり、楽しくなります。方言は、話しをするきっかけ作りには最高です。方言の数の自慢話も楽しみ。(60代)
- ・先日、夕食時にふるさとの方言が出て笑い合いました。(60代男性)

②方言に関わる①以外の意見等

- ・方言はいいと思っていますが、今の私にはどうでもいいかなと思います。とにかく一日一日今日も一日経ち、また明日がくる。前向きな考えが出来ないでいます。(60代)
- ・方言は生まれた場所特有なもの。それで何か特別生活が変わることはないが、これから先、福島で生まれ育ってきたという証が原発によって状況が変わってきてしまうのが大変恐い。(50代女性)
- ・今の社会標準語で話す事が多いですが、旅に出た時に、その地、その地の方言に出合う事があります。それが好きですね。(60代男性)
- ・他県の色々な方言を知るのもおもしろいと思う。(20代)
- ・方言が会話のネタになって良いと思う。方言が無い地域の友達は、かわいそうだと思う。(20代)

③の調査そのものへの意見（批判）では、「調査の意図がわからない」（60代男女）や「心の中だけのふるさとでいいです。この様な調査はもういいです。」（60代女性）のような批判的な意見が多かった。これらのほか、調査への批判的意見には以下のような厳しいものがあつた。

- ・方言は大事ですが、残るものは残るし、調査までしなくても良いのではないかと思います。文化庁も他の大切な事に目を向けて取り組んでほしいです。なんでこんな事にと、いらだちを感じます。(50代女性)

- ・その言葉でしかいい表せない単語って全国にたくさんあると思います。それは今回避難したからとかは関係ないと思います。(中略) こんな調査をするよりも大事な事ありませんか?(中略) 私たちは、前に進みたくても「国」に止められているのです。気持ちを逆なでられている様で頭にきます。(40代女性)
- ・方言は心のふるさとなのだし、調査するまでもないと思う。復興にきちんとお金を使ってほしい!(20代)

本調査について好意的な意見は、次の2件だけだった。

- ・方言と震災・避難について深く意識していなかったが、今回のアンケートでその重要度を認識しました。遠く離れて暮らしていてもIT機器を利用しコミュニケーションが可能になり、精神的な支えになるように願っています。(60代男性)
- ・普通に話をしていて、これは方言だと思う時、思わず一緒に、そう、そう、その言葉といって笑っています。方言問題の意識調査ありがとうございます。とても楽しくこれからも方言で話せそうです。(60代女性)

④その他

その他には様々な記述が見られたが、次の記述のように今の暮らしに関わる課題・問題点が多かった。また、最後の二つの意見は、方言や無形文化財の保存についての要望である。

- ・避難とか被災者とか言われるのがはっきりいっていやです。もう少しそっとしておいてほしいです。私ばかりではないと思います。特に年配の人は思っています。(50代女性)
- ・手を握り合って気さくな話し相手になってくれる、和やかな雰囲気。親睦。それが今は原発災害で離散。政治家の皆さんにも、福島の被災地に足を運び、今の惨状を見てもらいたいものです。(80代男性)
- ・イベントの最後にならず「ふるさと」を唄いますが、帰れない町の「ふるさと」は唄いたくない。「上を向いてあるこう」ぐらいにしてほしい。(60代女性)
- ・言葉の大切な暖さも大切ですが、故郷を忘れない「心」も大切だと思います。ゴーストタウンと世間では言われるが、帰る所はあそこしかないと考えています。(20代)
- ・言葉が変化していくことは宿命ですが、美しい言葉や、方言でしか表現出来ないニュアンス等は無くなってほしくないものです。最後に方言の未来について提案ですが、土地に伝わる民話をその土地の方言で記録するなんて、どうでしょうか?(中略) 高齢者と子供に接点が出るようにして行けると良いなと思います。(50代男性)
- ・形あるもの(有形文化財)の保存も必要だが、無形文化財は震災前でさえ後継者不足だったのに少ない後継者がバラバラになり、又集まる機会も少なく、今後なくなっていくので

は。(中略) 国などで映像や音源として残すような事業をしてほしい。(30代女性)

4. まとめ

茨城県つくば市内に避難されている多くの方々とつくば市のご協力を得て行った調査によって、避難者の言語生活の変化と方言意識について明らかにできたいくつかのことについて、改めてここにまとめておきたい。

- ・家族・親族や同郷の顔見知りとの会話は、いずれも方言使用が震災前に比べて減少しており、その状況について「さびしい」「ストレスを感じる」などと思っていることがわかった。その理由は家族・親族・顔見知りと離れ離れになって避難生活を送っていることによるものと推測できる。震災による家族との離散が言語生活の変化として確認された。
- ・それとは逆に、顔見知りでない人や現在の居住地の人との会話は増加しており、その時の会話では標準語あるいは方言と標準語が交じったことばを使う機会が増加している。
- ・震災後、回答者の約3分の1の人が「方言が通じなかった」「避難先の方言がわからない」「方言が話せない」など、ことば（方言）に関連して困ったり嫌な思いをした経験をしている。衣食住に比べると認識されにくいのが、ことば（方言）の問題は避難者の生活の質や心の問題につながる可能性のあるものであり、避難者支援でも注目すべき点である。
- ・「がんばっぺ福島」のような方言エール・方言スローガンや「がんばろう〇〇」のような共通語によるエール・スローガンについては、好意的に受け止めている人が多いものの、不快に感じたり、そのことばに傷ついている被災者もいることがわかった。これらのエール・スローガンが必ずしも被災者の力になっているわけではなく、支援する側との意識のギャップが確認された。
- ・方言や地域の文化を保存しようとする取り組みについて、「必要だ」「心の支えになる」と回答している人が多いものの、否定的評価の「不要だ」「優先順位が違う」の回答も少なくなかった。否定的評価をしているのは、女性や50代以下の若い世代に多い。
- ・ふるさとの方言への態度や方言継承については、ふるさとの方言について「好き」「愛着を感じる」人は6割台にとどまり、積極的に若い世代にふるさとの方言を継承してほしいとは思わないという態度であった。
- ・その他、多くの方からたくさんの自由記述があった。その自由記述からも、ふるさとの方言への思い（安らぎ・良さ・あたたかさを感じる、力づけられる、等）とともに、先の見えない避難生活の現状をうかがうことができた。

厳しい状況の中にもかかわらず、多くの方々から大変ていねいなご回答をいただくことができたお蔭で本稿を成すことができた。本稿で指摘した避難生活における種々の問題点は、

支援者グループや行政などに届けるとともに連携しあい、避難されている方々の今後に結びつけられれば幸いである。また、いただいた多くのご意見の中には、調査に対する批判的な意見も少なくなかった。それらは今後の私自身の方言に関わる取り組みや調査研究に活かしていきたい。

[付記]

本研究は、平成24年度文化庁委託事業「東日本大震災において危機的な状況が危惧される方言の実態に関する調査研究（茨城県）」（代表：杉本妙子）の一環として行った調査によるものです。調査の趣旨をご理解くださり、調査にご協力くださった回答者の皆様に心より感謝申し上げます。また、調査票の発送については、つくば市総務部総務課にお力添えをいただきました。記して感謝申し上げます。

注

- (1) 調査対象者を中学生以上としたのは、避難者の言語生活において問題が生じているとすれば、その改善に向けた検討のためには、より幅広い世代の言語生活の現状や方言意識を知る必要があると考えたからである。なお、中高生といった若年層をも対象とすることから、調査の実施に当たっては、調査票の内容や表現に問題がないかどうか、事前につくば市役所総務課に目を通してもらう等の対応を行った。
- (2) つくば市内の避難者数はつくば市ホームページ発表「東日本大震災避難者のつくば市内避難者数」による。2012年8月頃から500人強の避難者数の状況が続いている。また、茨城県への県外からの避難者のほとんどは福島県からの避難者である。茨城県災害対策本部によると、2013年5月13日現在、出身県別避難者は福島県3,871人（97.5%）、宮城県66人（1.7%）、岩手県30人（0.8%）、その他5人（0.1%）である。
- (3) 調査票は『H24文化庁委託事業報告（茨城県）』に示した。
- (4) 福島県から大分県に避難されている方を対象に同様の調査票を用いて調査している半沢康(2013)においても、同様の傾向が確認できる。すなわち、「避難生活の中で方言に関してなんらかの問題が生じたという回答が少数ながら見られ」（22名中の4名）たり、半数（20名中）の方が家族と福島方言を話す機会が震災前と比べて「減った」と回答している。そして、「他県への避難によって福島方言の使用自体が減少した人の半数がそうした状況をストレスと感じている」と述べている。（pp.5～6）
- (5) 本稿では、調査票で用いた「標準語」の表現を用いる。「共通語」でなく「標準語」を用いたのは、幅広い年代の人にとって自身が使うこととしては「標準語」のほうが馴染みのある表現と考えられたからである。なお、B04.の設問に関しては、調査票・本稿とも「共通語」を用いる。
- (6) 設問C、Eの記述回答の中にも、「ことばは時代とともに変化していくものだ」「帰る所がないのに方言はいらない」とか「方言は大事だが、残るものは残るし、調査までしなくてもいいのではないかな。他にもっと大切な事に目を向けて取り組んでほしい」「方言は心のふるさとなのだし、調査するまでもない。復興にきちんとお金を使ってほしい」などの回答があることから、方言が生活における問題として認識されにくいことがわかる。
- (7) 調査は、被災地・被災者支援経験のある主に学生を対象に、2012年11～2013年2月上旬に調査票を

配布・回収して行った。有効回答数は44。被災者対象のB02.と同一の設問の結果は、「01.必要だ 36 (81.8%) 02.必要ではない 1 (2.3%) 03.どちらともいえない 7 (15.9%)」だった。また、支援者自身の活動にとっての方言パンフレット等の必要性については、「01.必要だ 1 (2.3%) 02.必要ではない 35 (79.5%) 03.どちらともいえない 8 (18.2%)」だった。詳細は杉本(2013b)をご覧ください。

- (8) この項目の回答欄の余白に、自由記述として「福島県の浜通り地区は標準語に近いのでさほど必要性は感じない」(60代女性)、「南相馬市の方言はあまりきつくありませんが、高齢者の場合は必要かも」(70代女性)があった。また、B01.の「その他」に「方言といっても標準語に近いので特別困らない」(80代女性)の記述が見られる。
- (9) 避難生活をおくる被災者が置かれた現状や抱える課題を把握することを調査目的の一つとした原口(2013)では、「震災発生から約1年半が経過した段階で実施した本アンケートからは、いまだ多くの方が先行きも見えず、不安な毎日を送っていらっしゃる事が返送されてきた回答から浮き彫りとなった。(中略)精神的に不安定であったり、健康不調者をかかえる世帯は約8割に上っており、東京電力への損害賠償についても、「満足している」という回答は圧倒的に少なく、ADR申立てや訴訟の増加にみられるように不満の声は依然より増している。」(p.79)と述べている。方言に関わる課題を把握しようとした本調査で得られた回答者の声と重なるところがある。

参考文献

- 杉本妙子(2013a) 「被災者に対する意識調査—つくば市に避難されている方々の場合—」、『平成24(2012)年度文化庁委託事業報告書 東日本大震災において危機的な状況が危惧される方言の実態に関する調査研究(茨城県)』、pp.387-396
- 杉本妙子(2013b) 「支援者に対する意識調査」、『平成24(2012)年度文化庁委託事業報告書 東日本大震災において危機的な状況が危惧される方言の実態に関する調査研究(茨城県)』、pp.397-404
- 杉本妙子、他(2013) 『平成24(2012)年度文化庁委託事業報告書 東日本大震災において危機的な状況が危惧される方言の実態に関する調査研究(茨城県)』
- 原口弥生(2013) 「東日本大震災にともなう茨城県への広域避難者アンケート調査結果」、『茨城大学地域総合研究所年報』第46号、pp.61-80
- 半沢康(2013) 「被災された方々および支援者の方言意識」、『2012年度文化庁委託事業報告書 東日本大震災において危機的な状況が危惧される方言の実態に関する調査研究(福島県)』、福島大学人間発達文化学類国語研究室、pp.5-14